

子どもの描く絵について

* なぜ子どもの書く絵について調べようかと思ったのか？

中学生の時、美術の先生から『阪神大震災の被害にあった子どもたちは太陽を黒色で書いていた』という話を聞いたことがあった。太陽を黒く書いていたことには、実際に黒く見えたという事実と、心理的描写を表しているのだと思った。実習中も、子どもが黒色のクレヨンばかり使うことに疑問を抱き、保育士に相談している場面を見た。子どもが一生懸命に書いている絵にはただ楽しんで書いていたり、でたために書いているだけではなく、絵一つ一つに意味があるのだと、感じた。

だからこれから保育士になる私が、子どもたちが一生懸命に書く絵から、子どもたちの心理や伝えたいことを少しでも理解してあげたい、と思い。子どもの描く絵について調べることにした。

* 絵を描くことの大切さ

1、自分の思いや喜びを伝授する表現手段のひとつ

・・・「お家でこんな大きなトマトが取れたのよ」「虫取りに行つて、バッタを捕まえたの。そのバッタの足、こんなだったよ」と、自分の体験したこと、感じたことを絵に表現することにより他人に伝達する。特に、言語活動が未発達の子供にとっては、自分の思いを伝える大事な表現手段である。

2、絵を描くという具体的活動を通して、事物に対する認識や思考を深め、想像力を豊かにする

・・・認識が深まれば詳しく形を描く。形を詳しく描くことによって、対象の読み取りが深くなりさらに認識が深まると、観察、表現、認識が相互に重なり合つてさらに深め合つていく。そういう活動の中で創造力が高まり、豊かにしていくのである。

3、絵を通して、身近な出来事や暮らしを掘り起こす

・・・身近な出来事や暮らしの様子を、詩や作文や日記に書くことの大切さと同じように、絵によって表現することもとても重要なことである。自分の身近に起こつたことや、私たちの暮らしの様子を絵に描く、描くことによって深く見たり考えたりする。じっくりみたり、思考を深めるためには、絵に描くなど、具体的な活動を通してやるのがとても大事で、そういう活動を通してしか、深く、豊かには育たないのである。

4、感受性を深め、想像の世界を豊かに広げ、情操を養う

・・・お話の絵を描くときでも、登場人物になり切り、想像の世界に浸っている。お話の世界に入

り込むことによって、感受性を深め、想像の世界を豊かに広げる。それが美術教育のひとつのねらいであり、豊かな情操を養うことにもなる。

(「子どもの絵—成長を見つめて—」より引用)

* 幼児は知っていることを絵に描く

幼児は、見えた通りに描くのではなく、知っていることを絵に描く。気付いたこと、発見したこと、感動したことを、胸をドキドキ、ワクワクさせながら描いている。だから気付いたこと、印象に残ったものは、写実的に見えた通りに描くのではなく、象徴的に特徴だけを、ときには絵記号で、ときには大きく描くのである。

* 絵を描く発達過程

誕生し、殴り書き期から始まり象徴期、図式期と発達していく。

* 殴り書き

子どもは、手を動かすという運動感覚を通した機能的な快感を味わう程度で、《かく》という意識はあまりない。やがて、ひじを軸とした腕の往復運動をしながら、横線や山型の線を何重にも重ねるようにして描くようになる。運動機能の統制がとれるようになるにつれて、紙に平行に手が動くようになり、手首を軸として左右だけでなく、上下に動かして縦線が描けるようになる。

* 殴り書きの段階その1(1歳前後)

殴り書きの始まりは、親が手紙を書いているのを真似たり、鉛筆やクレヨンを持って振り回すことから始まる。

特徴・・・でたらめ。動作がまだ統御されていない。

色彩・・・使う色に意図はなく、単に楽しみのためにだけ色を使っている。

指導・・・絵を描く機会をあたえる。でたらめだからといって妨害したり落胆させない。

技法・・・広告紙、新聞紙、ほご紙。クレヨン類、水絵の具。

* 殴り書きの段階その2(2歳～3歳ごろ)

この時期のあるときに、手の動きと紙に描かれたものの間につながりのあることを発見する。単に手を動かして殴り書きをすることに喜びを持っていた子どもが、2歳前後になると、線を引きながらイメージを浮かべ、何かつぶやきながら殴り書きをするようになる。「自転車ブーブー、信

号、赤」、「電車ガタンガタン」と、線をまるで自動車や電車が走る軌跡にたとえて、擬音を発しながら線を走らせるようになる。このように、象徴的に描いた形を命名したり、説明したりする時期の絵を「象徴期」という。「象徴期」は一般的には2歳半前後頃から4歳の終わり頃までで、年齢が進むにつれて形も複雑になり、内容も豊富になってくる。今まで何の意味も持たず無意識に描いていた線に、意味を持たせようとするのは非常に重要なことである。

特徴…動作が、統御される。自由自在に絵が描けることで自信を得る。

色彩…1歳前後と同じ。

指導…1歳前後と同じだが、常に励ましていくことが大切。

技法…ときどき、白、ねずみ色、うす茶、など派手でない画用紙。

* 線遊びの指導

単に意味を持たせないで線を描く練習を繰り返すのではなく、出来るだけ具体物と結びつけて線遊びをすることが大切である。ボールを部屋の中でコロコロ転がして遊んでから「今度は紙の上でボールコロコロしようね」と、「赤や青のクレヨンなどで「コロコロ」とつぶやきながら画用紙に描いてみる。あるいは「バスバス走る」のように「バスに乗ってどこかへ行こう」と、クレヨンなどの線を「ブプー、信号だよ」とつぶやきながら描く、などの指導をする。

* 殴り書きの段階その3(4歳ごろ)

やっと絵に興味をもつようになる。「おかあさんとかいものにいったのよ」などと、お話をしながら描くこともある。空想(心のうごき)と絵とを結びつけるようになっていく。

特徴…運動感覚にまかせて描く段階から、空想(心のうごき)を描く段階に移る。

色彩…異なった物や意味を区別するため、情緒反応として色を選ぶ。

指導…子どもの思考に同意し、決して実物に似ることを期待してはならない。

技法…色数は12色を超えない方がよい。フィンガーペイント(指絵の具)、水絵の具。

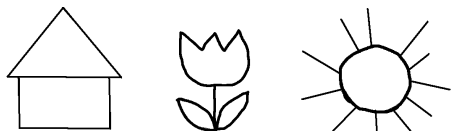
(「原色 よい絵・よくない絵事典」より引用)

* 絵記号を組み合わせて絵を描く

5歳前後の図式期の子どもは、太陽、チューリップ、家といったような典型的な絵記号を組み合わせて絵を描くようになる。チューリップは花の代表、正方形の上に三角形の家は家という文字のようなもの、太陽は、紙の上が空、と紙の上下を表す絵記号だとされる。このように、絵記号のような典型的な形を組み合わせて図式的に絵を描こうとする。このことは、子どもが絵を描くための一般的な形態の概念を形づくっていく上で、重要なことなのである。

これらの絵記号を一本の線(基底線)の上に組み合わせて描くのは、自分の想像の世界を広げる舞台装置のようなものである。

このような、絵記号を組み合わせて描く絵も、ある時期では必要である。



こういう概念形成を大事にしながら、一方では、さらに新しい概念を形成していく働きかけも必要である。例えば「これ、誰？○○ちゃんはどんな服を着ているかな」と概念化した人形のような絵を個別化したり、「今、庭にはどんな花が咲いているかな」と、チューリップ以外の花に目を向けさせる。そうして、固定化した概念を少しずつ個別化、複雑化し、人では動作やその人の特徴を、花ではその特徴をとらえさせる指導が必要である。

(「子どもの絵は何を語るかー発達科学の視点からー」より引用)

* 図式期(5歳～8歳)

自分の描きたいことを頭に浮かべるままに、紙の上に羅列的、断片的に描いていた象徴期の幼児が5歳前後になると画用紙の上には太陽と空色で空を描く。画用紙の下には基底線を引いて地面と設定する。その基底線の上に家、木、花、人を描く。家、木、花、人は重なりはなく、奥行きもない。ほとんどの絵は側面から見た平面的な描き方で、家の向こうに見える木でも重ねないように、左右に広げて描いたり、ときには上に積み上げて描いたりする。

これは、三次元の空間を二次元の平面の紙に描く1つの表現方法をその子なりに確立したことを意味している。

(「子どもの絵ー成長を見つめてー」より引用)

* 独特な表現様式

「おびぞら」・・・どの国のどんな子どもも、例外なくはじめに描く空は一本の線であり、やがて帯のような空になる。これはなぜかというと、幼児の感覚では《空は高い》からである。これは小学3年生ごろからなくなっていく。

「色が変わったおびぞら」・・・4～5歳ごろの幼児によく表れる。色に意味はなく、ただ楽しんでい
るだけである。このとき、

「お日様」・・・幼児では毎回のようによく書く子が多い。視覚をはたらかせる時期(小学4年生ごろ)になるとしぜんになくなっていく。知恵おくれの子には、高学年になっても描く子がいる。

「たくさんの車輪」・・・幼児特有の表現様式で、幼児にとって電車や自動車は《速く走る》ものであり車輪を強調して描く。ふつうの子どもの表現で、あるものを強調する方法は、形を大きく描く・量を増やす・色彩で目立たせる、の3つである。

そのため、幼児が車のスピード感を出す時はこの3つの方法のうちで、車の車輪の数を多くする方法を選ぶ。



例えば、左の絵のような車の絵を描く子がいる。きちんとした、上手な絵を期待されている子は、幼児らしい心の動きを失って、このような絵を描く。親や教師にて訂正されると、自己表現の能力を失って、動きのない絵を描く。

「アニミズム」・・・動物や小石に話しかけたり、太陽や動物の顔に人の顔を描いたりするように、動物やものにも人と同じ心があり、会話も出来ると考え、絵に表現すること。感情が豊かで、デリケートな心の持ち主の子の絵に多く見られる。アニミズムは擬人化ともいうが、これは子どもの想像の世界を広げる上でも、きわめて大切なことである。

「X 線画」・・・子どもが絵を描く際にとる強調の方法のひとつである。子どもの表現の原則である《自分が大切だと思うもの、強く関心をひいたこと、それを強調して描く》絵のこと。外から見えない内臓をはっきりみせるように子どもは外から消えないはずのものを描く。

「基底線」・・・見えるようにではなく、在るものを、自分の感情と感覚にもとづいて構成する描法である。基底線の上に、人、木、家などを倒したり、ひっくり返して描く。ものが立つ地面、境界線、スペース、時間の経過など、象徴的に意味する。

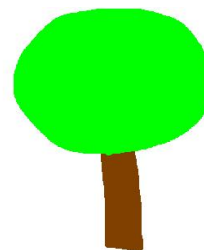
「帽子の樹木」・・・図式的表現をとる象徴主義の時代

(4歳～小学4年生頃)の樹木の普通の描き方である。

年齢、個性によって、様々な違いがある。

早くから写生をしたり、塗り絵、模倣をさ

せられている子どもはこのように描かない。



(絵)

「天にのぼる道《川》」・・・《遠近法》という固定した描法にとらわれていない子どもは、当然のように描く。

「光(熱)の色と形」・・・子どもは触覚で感じる光(熱)を、目で見えるような独特な色と形で表現することがよくある。高学年になってもこのような絵を描く子は、幼稚と考えるのではなく、特殊な創

造的能力の持ち主であると考えてよい。

* その子の心境を察してあたたかい対応を

絵を見ただけで一概に心理や性格を診断するのはさけないものだが、一目見ただけで、その子の心境が分かることもある。

(例)・自分が目立ちたい心境が強い子どもは無意識のうちに画面の大部分を橙色で塗っている絵。

・父に叱られたり、夫婦げんかなどで父を憎んで、父の顔を描いた部分だけ黒色で塗りつぶしたり角をつけている絵。

・現実の生活が嫌で、現実から逃避するため人形やお姫様が描かれた絵。

* 病気の発見

紫色を塗ると、その部分が病気だという例もときどきある。ある作品で5歳の子どもが描いた6点の作品のうち2つの作品には「眼がおかしいですよ」と眼の部分に紫色を塗って訴えている。他の作品では、黒、紫、黄、橙色を使い、イライラした心境を電光型の線を重ねて塗って叫んでいる絵だった。このあと、眼の検査を受け、診断の結果、この子は乱視と二つの目の病気が重なっていることが分かり、眼鏡をかけた。眼鏡をかけたことで、今まで見えなかった世界が、生まれて初めてよく見えるようになったので、ほのぼのと青空と太陽と家を描いた。その後、凧あげをする自分を描き、みんなの中に溶け込んでいった。この他、怪獣やロボットの絵、戦争の絵など非常に攻撃的な絵を描いたり、お人形の絵の世界に閉じこもって自分の生活から逃避したり、自信がなくて小さくて弱々しい絵しか描けないなど、子どもの深層心理をはっきり絵に表すこともよくある。

これらの絵のように、自分の腹立つこと、悲しい気持ちなどを絵に描き、絵に描くことによって、その気持ちを洗い流すこともよくある。絵を見る大人の側としては、問題のある絵を描いた場合、その子の対応の仕方を十分に考え、あたたかくみつめてやる心配りが必要である。

* 色と心理

子どもは生後3ヶ月頃から色の識別が出来る。バレンタインの説によると、乳児の好む色は、黄、白、桃色、褐色、黒、青、緑の順であるといわれている。しかし、実際に色の名前を覚え始めるのは生後1年目頃からである。2歳児くらいの子は、赤、桃色、黄色など数色くらいの色名を知っている。

絵を描くときでも、3歳半頃になると赤い服を着た人の服に赤い色を塗る。つまり、絵を描く対象と絵の色が一致する。それまでは普通、自分の好みの色のクレヨンを持って自由に絵を描くだけ

で、絵を描くとき色についてはあまり意識をしていないようである。5歳くらいから色彩が豊かになり始めるが、色の使い方は赤、黄、青、緑と純色による明快な配色が多い。しかし子どもが直感的に使う色の配色が、見事に画面が一致しているときがある。色のぬり重ねや混色が出来るようになるにつれて、微妙な美しい配色をするようになる。

* 色による色彩感情

赤……………情熱、歓喜、陽気、興奮
ピンク……愛情、女性、幸福、温和
橙……………活発、陽気、元気、嫉妬
黄……………快活、希望、活動、明朗
黄緑………新鮮、自然、柔弱
緑……………平和、新鮮、安全、理性
青……………冷静、知性、深遠、悠久
薄青………理知、冷静、軽快
紫……………高貴、不安、神秘
白……………純粹、神聖、公明、清潔
灰……………平凡、恐怖、沈黙、陰鬱
黒……………厳肅、陰気、死滅、不安

私たちは色を見ていろいろな感情をいだき、特定の色を好んで使うことがよくある。また、色彩感情とまとめてあるが、色にとまなう感情は、個人によっても異なり、見るときの心情や環境や状況によっても異なるので、その色を使うから、その色が好きであるから、その人の性格がこうであるのだと断定する関係にはならない、ということに注意する必要がある。

* 好んで使う色とその子の傾向

赤、橙、黄色などの暖色系の色を好んで使う子は、あたたかい愛情のある家庭に育ち、明るい性格で友達も多く、協調性もある。しかし、同じ赤、橙、黄色でも、激しい線を重ねている場合は、強く愛情を求めて自己主張をしていたり、敵意や攻撃を表していることがある。

赤色、あるいは桃色を好んで使うときは、比較的心が開放された幸福感に満ち溢れ楽しいときである。橙、黄色のような色を好んで使う子は、比較的陽気で、積極的であり、友達と仲良く人気がある。黄色でもレモンイエローを好む子はおとなしく依存的である。

寒色系の中で、青、緑、緑青、うすい青を使う子は、冷静、知的ですなおで適応性がある。同じ寒色の中でも褐色や黒に近い思い色を使う子は、意思が強く、多少独断的、内向的な面もある。

ただ、そのような色を激しく重ねて塗る場合は、恐怖や不安、拒否を表していることもある。

緑色系の色を好んで使う子は、強調性があり、日常的なことをきちんとする。緑色の中でも、原色に近い色で激しい塗り方をする場合は、情緒性が欠け、特に赤と緑をけばけばしく交互に塗るときは、性的関心が強いときである。

寒色系の中でも明るい紫を好んで使う子は、他の子と少し性格的に異なり、感覚的に鋭いものを持ち、友だちは少ないが、自分なりの才能を持って安定している。ただ同じ紫色でも、目や特異的なところに塗ったりするときに、病気や不安的な要素を示すこともある。

黒、灰色の中で、灰色を好んで使う子の中には生活意欲に欠け、表面的にはおとなしいが、従順ではなく不安を持っていることがある。黒色で強い線を描く子には意思頑固な場合もあるが、恐怖や抑圧を感じていることがある。

* 幼児の自由表現に見られる性格

- 1、内気……遠慮がちな形体であり、目立たない色彩を使う。筆使いにスピード感がなく、じくじくしている。歌うときなども、かぼそい声で歌う。
- 2、人気者……のびのびした線と、調和した色を使う。いろいろな事物を画面に描く。赤と黄、赤と黒、黒と黄、といった反対色を好んで使う。友だちにも好かれ、人気がある。
- 3、わがまま……線が奔放に外に向かって走りまわっている。色は単色で描かれていながらも、人物にも表情が感じられる。わがままで、いつもグループの中心になろうとして、時には乱暴な行動をする。
- 4、気が弱い……何かものを表そうとするが、内容が貧弱で自信もなく、表現があいまいである。線は自信なく描き、色も目立たない色を選ぶ。
- 5、いつもビクビクしている……色をかなり多く使うが、弱々しく震えるような線を描く。思いつきみたいな色の扱い方をするため、表現への自信のなさが、表れる。しかし、内面的な誠実さを秘めている。
- 6、ぐずぐずしている……弱々しい、ためらいのある線を描く。
- 7、人に頼らない……どこに、どの色を使うかが明確であり、子どもの心が、はっきりと力強く表れている。自主性が強い。
- 8、人に頼る……広い空間が無意味にあり、描かれた事物に動きがない。依存的で、独立性のない行動が目立つ。デリケートな感情がうかがえる。
- 9、ごうじょう……力強い線で自分の場をとるようにかこった絵を描く。表面はおとなしく見えるが、強情で、言い出したら後にひかない。

(「原色 よい絵・よくない絵事典」より引用)

* 構造表現からみる子どもの心理状態

「月」……………月の場合、父親を表すのだが、「夜にならないと帰らない」お父さんのシンボルとされている。その黄色の暗示する意味から、特に「父親に甘えたい」という意味を表す。星がまたたく様子は「仲良しの友達がたくさん欲しい」という意味になる。

「海」……………海の絵は、「甘えのサイン」である。それは「彼らにとって一番安全な母親の胎内への退行を意味している」のである。子どもが海の絵を描いているときは、後戻りしたい気持ちのときが多く、しっかりと関わっていく必要があるときである。また、海の絵は、いったん後戻りしなければ先に進めない子どもの現状を物語っている。

「うずまき」……………うずまきは、特殊な母親のシンボルである。それは本人がまだ母親から分離出来ていない状態を表す。だから、だんだん加齢してからのうずまきの絵は、「自立する本人の前にたちはだかる脅威の存在として母親が登場する」と、とらえられる。

「火、火事」……………親から叱られた緊張感を現す表現に火や火事がある。子供が火遊びを怖がらず、隠れてでもやろうとする心の奥には、誰かに知られたい、知ってほしいという意識が裏返しになっている。

「鳥」……………とくに大きな鳥の絵には、よく気がつく母という意味がこめられている。鳥は「母親、母性のシンボル」だからである。特に、くちばしは人間にとっての手の役割を果たし、巣立ちするまでは、この母親の手によって餌が運ばれ、悪さをすれば容赦なく突かれる

「ロボット」……………ロボットは拘束されている本人を表す。人間に操作されているので、本人の意思が反映されていない事態の表現である。

「ゾウ」……………ゾウは「頼れる母」であり、「肝っ玉の大きい母、頼りがいがある母親の象徴」である。象の姿に「家であれこれと働く母の様子」や「何も言わずにコツコツと働き、なおかつ堂々としている母の日常の姿」が重なるのである

「怪獣」……………怪獣や戦っている絵というのは比較的男の子によく見られるが、兄弟ゲンカや怒りが絵に表れている。そして、怪獣に“代理戦争”をさせているのである。しかし、だからといって、それを取り除こうとするのはよくない。なぜなら絵を描くことが、一番身近なストレス解消法になっているからである。怪獣の絵を描いている子は興奮をしながら、絵の中の怪獣を戦わせている。自分の気持ちをぶつけるかのように時々声をだして、絵を描く子もいる。教室の子で兄弟がいる子がよく描くかどうかは分からないが、怪獣の絵は夢中になって描くことが多い。

(「麒麟の絵 父不在で 母さみし」より引用)

* 参考文献

- ・『原色 よい絵・よくない絵事典』 創造美育協会
- ・『子どもの絵ー成長をみつめてー』 東山明、東山直美
- ・『子どもの絵は何を語るかー発達科学の視点からー』 東山明、東山直美
- ・『キリンの絵 父不在で 母さみし』 渡部英夫、吉岡元

* 感想

今回、子どもが描く絵について調べて、絵を描くことの意味、大切さを改めて知ることが出来た。前から子どもが描く絵の心理について、とても興味があったので詳しく調べることが出来て良かった。今回学んだことを、保育士になった時に参考にしていきたいと思った。絵を描くことで心理が読み取れることもある、というように、「子どもは絵で何かを伝えている」という考えしかなかったが、伝えているだけではなく、描くこと自体が、子どもなりの苦悩や悩みを吐き出し、浄化させている役割もあるということは今回初めて分かった。だから、普段の子どもの表情や生活のみるだけではなく、子どもの描く絵からも子どもの心情を考えて、その時にあった対応をしていけるようにしたい、と思った。そのためにも年齢関係なく、子どもが絵を描く機会を多く作っていききたい、と思う。

子どもが絵を描く楽しさから自分の想いを絵で沢山表現していけるように、私自身も子どもと、絵を描く楽しさを共感していきたいと思った。